

御裳濯

世阿弥作

前

ワキ 官人

シテ 老翁

ツレ 男

後

シテ 興玉神

地は 伊勢

季は 五月

「山も内外の神詣で。く。二見の浦を尋ねん。

詞

「そもく是は雄略天皇に仕へ奉る臣下なり。我此度伊勢大神宮に参り。内外の宮めぐり殊には内外清浄の信心私なく候。又是より二見の浦石の鏡をも一見せばやと存じ候。

道行

「五十鈴川。清き流れの深緑。く。陰も百枝の松風の。をさまる木々の色までも。神の恵みの御陰ぞと。所からなる心地して。詠め妙なる気色かな。

く。

詞

「急ぎ候ふ程に。二見の浦に着きて候。是なる小田を見れば。幣帛を立て剩へ渴仰の気色見えて候。里人に尋ねばやと存じ候。

シテ、ツレ一声

「露ながら。水かげ草の種取りて。手玉もゆらく袂かな。

ツレ

「おり立つ田子の数添ふや。

二人

「御裳濯川の水ならん。

シテサシ

「有難や神の世継は久方の。天の村早稲種取りて。

二人

「今人の世に至るまで。四つの時日は曇りなくて。

千代万代の末かけて。流す田面の早苗取る。田子の裳裾の色はえて。袂ゆたかに楽しむなり。

歌

「種を蒔き。種を納めし神代より。草も木も。我大君の国なれば。く。何くも同じ神と君。隔てなき世に住まふ身の。誰か恵みの外ならん。実にや八島の外までも。波静にて吹く風の。枝を鳴

らさぬ天地の。神の威徳は有難や。く。

ワキ詞

「如何に是なる老人に尋ぬべき事の候。

シテ詞

「此方の事にて候ふか何事にて候ふぞ。

ワキ

「是なる小田を見れば。田水は豊かなるに猶川水をまかせ入れ。渴仰の気色見えたり不審にこそ候へ。

シテ

「さん候是は神の御田にて候。又此川は御裳濯川とて。田水は豊かなれども神水をまかせ入れ。五十の水口に幣帛を立て。神徳長久の恵みを仰ぐ政に

て候。

ワキ 「さて此御裳濯川はいつの代よりの名にて候ふぞ。

シテ 「さん候人皇十一代垂仁天皇の皇女。御名は倭姫の皇子。忝くも御神鏡をいたゞき国々を廻り給ひしに。当国にてはあの二見の浦より。此川路に就いて上り給ひしに。御裳の裾よごれたりしを。此川にて濯ぎ給ひしによつて。御裳濯川とは申すなり。

ツレ 「其時田作の翁のありしが。神の御鎮座になるべき

所やあると御尋ねありしに。

シテ 「彼翁申すやう。さん候此川上に三十八万歳の間此山を守護し奉る者の候。御道しるべ申さんとて。下つ岩根を敷きて参らすると云へり。されば其時の田作の翁は。今の興玉の神是なり。

ツレ 「其時尋ね入り給ひしによつて。山をば神路山といひ。

シテ 「川をば神路川と名づけ。

ツレ「流れ久しく澄める世の。」

二人「天長地久嘉辰令月の。御影濁らぬ御裳濯川の。神徳深き水田なれば。神にまかせて作るなり。」

ワキ「謂を聞けば有難や。さてく今の名にしおふ。其御裳裾を濯ぎ給ひし。在所は取り分き何くの程ぞ。」

シテ「されば先にも申しゝ如く。御裳濯川と名づけし事。取り分き此瀬の辺なれば。神が瀬とこゝを申すな

り。

ワキ「あら面白や神が瀬とは。神かぜとこそ聞き馴れしに。」

シテ「されば常には神風や。伊勢と申すも神の誓ひ。

ツレ「又此川には神が瀬とて。神の渡瀬のある故に。神路川とも申すなり。」

シテ「然れば歌人の。」

二人「言の葉にも。」

地

「山の辺の。御井をみがへり神が瀬の。く。伊勢の乙女等あひ見つるかなとよみしも。此倭姫の古へを。よみ奉る心なり。千早振る。神路の山の村雨は。種を蒔くなる神の代の。久しき湿ひに。天の小稲の天が下。広き恵みに逢ふ事も。唯神徳にあらずや。有難の神の誓ひやな。あら有難の誓ひや。

ワキ詞

「猶々神慮残さず御物語り候へ。

地クリ

「忝なの御事や。我等迷ひの凡夫として。神徳王事の恵みを受くる。仰ぎても猶あまりあり。

シテサシ

「それ人は天下の神物なり。かるが故に正直を以て本とす。

地

「日月は四州を照らすといへども。分きては唯正直の頭に宿り給ふ。

シテ

「然れば二所宗廟の。御心を知らんと思はゞ。

地

「正直を以て本とすべし。

クセ

「然るに大御神。地神の為に皇孫を。蘆原の中つ
国に。降り奉らんとて。三種の神宝を。自ら授
け給ひしに。其三種にも取り分きて。八咫の鏡は
殊になほ。御影を写しつゝ。御身を放ち給はず。
其鏡の如くに。万境を写しながら。しかも一物を
貯へず。神牀を清めて。正直を授け給へり。され
ば生きとし生けるもの。日月の恩徳に。預らざる
はなき物を。是れ以て当宮の。御神徳にてあらざ
るや。

シテ

「然れば神代の昔より。

地

「今人の世に至るまで。神徳は明らかに。垂仁天皇
の御宇かとよ。下つ岩根に宮居して。皇大神とな
り給ふ。是れ正に本覚の。和光に交じる塵の世を。
守らん為めの御誓。仏も同じ御心の。自性真如の
月読の。神とも示現し給へり。

ロンギ地

「実に有難き神道の。く。曇らぬ御代を受けて知

る。人の心ぞ有難き。

二人「一河の流れ汲みて知る。今日しもこゝに都人。君

と神とは隔なき。御物語り申すなり。

地「そも老人は誰なれば。わきて委しく白木綿の。

二人「斯かる御代ぞと仰ぎ見る。

地「天つ空音の。

二人「時鳥。

地「一声鳴くも折からに。神の告ぞと木綿四手の。田

長と見えつるが。我興玉の神よとて。御裳濯川の
渡瀬なる。神が瀬を打ち渡りて。跡も波に入りに
けり。跡白波に入りにけり。(中入)

ワキ歌「実に今とても神の代の。く。誓ひは尽きぬしる

しとて。神と君との御恵み。誠なりけり有難や。
く。

後ジテ「君が代は尽きじとぞ思ふ神風や。御裳濯川の澄ま
ん限は。守るべしく。百王守護の神明として。

和光普き皇の数。すめら世までも守りの神。興玉
の神とは我事なり。

地 「や玉垣の。内外の宮居声満ちて。

シテ 「月読の宮居照りまさる。

地 「潔き影や鏡の宮所。

シテ 「空澄む雲も朝熊や。

地 「汐干の石と顕はれしも。濟度方便の影な忘れそ。

く。千早振るなりゆだちの袖。
(神舞)

シテ 「神風や。伊勢の浜荻折り敷きて。

地 「旅寐やすらんあらし浜辺に。く。

シテ 「清き渚の玉の数々。

地 「光りも天照らす。

シテ 「天の岩戸の昔をうつす。

地 「榊葉の神歌。

シテ 「千早の袖や御裳濯川の。

地 「波の白和幣。

シテ「水の青和幣。

地「取りぐさまぐの神遊び。鏡の宮居朝妻の汐時に。沖より見えて白波の。沖より見えて白波の。又立ち帰り二見の。浜松の千代の影ある。神と君こそ久しけれ。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第八輯』大和田建樹 著